

フリウリ語における複合時制形の過去分詞に前接される人称代名詞与格  
Pronomi dativi encliticizzati ai participi passati costituenti i tempi composti in  
alcune varietà del friulano

山本真司

Shinji YAMAMOTO

0. はじめに 本稿では、フリウリ語<sup>1)</sup>の幾つかの方言に存在する、動詞の複合時制形(助動詞 + 過去分詞)の過去分詞に人称代名詞与格3人称単数形・複数形が前接されるという現象を取り上げる。この問題は、すでに DELLA PORTA 1922 などにもわずかながら言及されているが、明確かつ組織的に取り上げた最初の研究は マルケッティのフリウリ語文法 (MARCHETTI 1952) [以下、単に“MARCHETTI”あるいは「マルケッティ」とする]<sup>2)</sup>であると思われる。その後、現在に至るまで、この現象についての研究は、量・質の観点から、特に目覚ましい進展があったとは言えないようである。そのため、本稿では、このマルケッティを出発点として、それに追加・修正を加えつつ、考察を進めることにする。

1. 人称代名詞の与格・対格の接語形 まず最初に確認しておくが、フリウリ中部・東部方言およびコイネー(中部方言を基にした共通語)においては、<sup>3)</sup>通常、人称代名詞の与格・対格の接語形は、動詞定形に対してはその前に置かれる(つまり動詞に対して後接語 proclitico<sup>4)</sup>になる)。

(1) 与格の例 (MARCHETTI, p. 138 から抜粋)。なお、以下、例文の通し番号は山本による。

1) tu mi disis<sup>5)</sup>「君は私に言う」<sup>6)</sup>(tu 人称代名詞2人称単数主格接語形,<sup>7)</sup> mi 人称代名詞与格1人称単数, disis 動詞 di の直説法現在2人称単数形)<sup>8)</sup>[以下、簡略化のため、「人称代名詞与格」等の「人称代名詞」と「動詞 di の」は省略する]

2) ti disevi「私は君に言っていた」(ti 与格2人称単数, disevi 直説法半過去1人称単数)

3) j disei「私は彼(彼女)に言った」(j 与格3人称単数, disei 直説法遠過去1人称単数)

4) us disarai「私は君たちに(お前様に)言おう」(us 与格2人称複数, disarai 未来1人称単数形)

5) se ur dises「もし私が彼らに言うなら」(se 接続詞「もし」, ur 与格3人称複数, dises 接続法半過去1人称単数または3人称単数形 [同音異義語, ここでは仮に前者に解しておく])

6) tu nus disaràs「君は私たちに言うだろう」(nus 与格1人称複数, disaràs 未来2人称単数形)

(2) 対格の例 (MARCHETTI, p. 138, 139)。

7) mi cjàlin「彼らは私を見る」(mi 人称代名詞対格1人称単数, cjàlin 動詞 cjalâ の直説法現在3人称複数形) [以下、「人称代名詞対格」等の「人称代名詞」と「動詞 cjalâ の」は省略する]

8) ti cjalin「私達は君を見る」(ti 対格1人称単数, cjalin 直説法現在1人称複数形)

9) lu/la cjalàvis「君達は彼/彼女を見ていた」(lu 対格3人称単数男性, la 対格3人称単数女性, cjalàvis

### 直説法半過去 2 人称複数形

- 10) nus cjalàvis 「君達は私たちを見ていた」(nus 対格 1 人称複数)
- 11) us cjararin 「私達は君たちを見るだろう」(us 対格 2 人称複数, cjararin 未来形 1 人称複数)
- 12) se ju cjalassin 「もし私たちが彼らを見るとしたら」(se 接続詞, ju 対格 3 人称複数男性, cjalassin 接続法半過去 1 人称複数形または 3 人称複数形 [同音異義語, ここでは仮に前者に解しておく])
- 13) se lis cjalassin 「もし私たちが彼女らを見るとしたら」(lis 対格 3 人称複数女性形)

**2. 複合時制形 (完了形) を構成する過去分詞に前接する人称代名詞与格形** 対格・与格の接語形は動詞定形に対して後接されるというこの原則は, 多くの方言において, 動詞が複合時制形 (助動詞 + 過去分詞) である場合にも当てはまる (MARCHETTI, p. 140).

- 14) ti varai puartât 「私は君に持って行ってしまっているだろう」(varai puartât 動詞 puartâ の先立未来形 1 人称複数)
- 15) tu ur às puartât 「君は彼らに持って行ってしまっているだろう」(tu às puartât 動詞 puartâ の直説法近過去 2 人称単数)

ところが, 幾つかの方言においては, 人称代名詞与格接語形 3 人称単数 (方言により *i, j*,<sup>9)</sup> *gi* などの形で現れる) および 3 人称複数形 (方言により *[i]ur*,<sup>10)</sup> *i, j* などの形で現れる) が, 動詞の複合時制形<sup>11)</sup> を構成する過去分詞の語末に接続される (つまり動詞に対して前接語 *enclitico* になる) という現象 (これ以降, 単に「与格の過去分詞への前接」と呼ぶことにする) がみられる. マルケッティは以下のような用例を挙げている (MARCHETTI, p. 140). なお, 与格の代名詞を付けた時に *puartât* が *puartad-* となる, つまり末尾の無声子音 *-t* が有声子音 *-d-* となり, 同時にその子音の前の長母音 *â* が *a* と短くなるのは, フリウリ語の形態音韻論上, 規則的な変化である (詳しくは, 第 8 章を参照).

- 16) 'o ài puartadj<sup>12)</sup> 「私は彼 (彼女) のために持って行った」('o 1 人称単数主格代名詞接語形 [ただし, 標準化正書法では単に *o* と書く], ài puartât 動詞 puartâ の直説法近過去 1 人称単数)
- 17) tu às puartâdiur 「君は彼 (彼女) らのために持って行った」

対格の人称代名詞の場合, 与格の場合のような過去分詞への前接は起きないようである. ただし, 与格と対格の人称代名詞が組み合わされた場合, (前述のような与格の過去分詞への前接が可能な方言においては) 両者を一緒に過去分詞に前接することができる (ただし, この場合, 対格は 3 人称単数・複数のものに限られる). 引き続きマルケッティから用例を挙げておく (MARCHETTI, p. 140). なお, 与格と組み合わされると, 対格の人称代名詞 (3 人称) を示す要素は, 単独の場合とは異なる形を取り, 男性単数 *-al*, 女性単数 *-e*, 男性複数 *-ai*, 女性複数 *-es* となることに注意.

・与格 3 人称単数形 *-i* と対格諸形との組み合わせの例:

- 18) 'o ài puartâdial 「私は彼 (彼女) にそれ (男性単数) を持って行った」
- 19) 'o ài puartâdie 「私は彼 (彼女) にそれ (女性単数) を持って行った」

20) 'o ài puartàdiai 「私は彼（彼女）にそれら（男性複数）を持って行った」

21) 'o ài puartàdies 「私は彼（彼女）にそれら（女性複数）を持って行った」

・与格 3 人称複数形 -[i]ur- と対格諸形との組み合わせの例：

22) 'o ài puartàdiural 「私は彼（彼女）らにそれ（男性単数）を持って行った」

23) 'o ài puartàdiure 「私は彼（彼女）らにそれ（女性単数）を持って行った」

24) 'o ài puartàdiurai 「私は彼（彼女）らにそれら（男性複数）を持って行った」

25) 'o ài puartàdiures 「私は彼（彼女）らにそれら（女性複数）を持って行った」

しかし、コイナーを含む多くの方言では、このような与格と対格の人称代名詞の組み合わせの場合も、以下の例（MARCHETTI, p. 140）のように、両者をともに動詞の前に置く。なお、与格の人称代名詞の 1 人称単数、2 人称単数を示す要素は、単独の単語をなす場合とは違う形に変化して（母音削除を起こして）、*mi > m'*, *ti > t'* となっていることに注意（ただし、標準化正書法では、アポストロフィーは使わず、*mal, tai, tes* のように、後続の対格形とひと続きに書く）。

26) *m'al ài puartât* 「私は私自身のためににそれ（男性単数）を持って行った」

27) *j'e ài puartade* 「私は彼（彼女）にそれ（女性単数）を持って行った」

28) *t'ai ài puartâz* 「私は君にそれら（男性複数）を持って行った」

29) *t'es ài puartadis* 「私は君にそれら（女性複数）を持って行った」

30) *ur al vin puartât* 「私達は彼ら（彼女ら）にそれ（男性単数）を持って行った」（*vin puartât* 動詞 *puartâ* の直説法近過去 1 人称複数）

31) *ur es veis puartadis* 「君達は彼ら（彼女ら）にそれら（女性複数）を持って行った」（*veis puartât* 動詞 *puartâ* の直説法近過去 2 人称複数）

**3. 地理的分布の問題** このような、与格の過去分詞への前接が見られる地域として、マルケッティは、ジェモーナ Gemona 地区とゴリツィア Gorizia 地区を挙げ、この現象は「普通の中部方言には無縁のもの」と言う（MARCHETTI, p. 140）。ちなみにジェモーナは、マルケッティの出身地である。

今回は詳しい調査ができなかったが、ジェモーナの方言は、二十世紀後半に変化が急速に進んだことが知られているので、<sup>13)</sup> 今ではこの現象ももはや活力を持っていないのではないかと疑われる。

また、ゴリツィア地区 *il Goriziano* と言うのは、フリウリ東部のゴリツィア市を中心としたその周辺、普通は県域をさすのが普通だが、実は、この現象は、狭い意味でのゴリツィア地区を超えて、フリウリ平野南部の、さまざまな場所に見いだされるようである。たとえば、フリウリ南部の 50 あまりの場所から収集された民話・昔話を収めた民話集 *Tiaris di Aculee* を参照すると、行政的にはゴリツィア県に属さない多くの場所 <sup>14)</sup> の方言で、この現象の実例が見つかる。

この民話集に取り上げられた地域（本のタイトルに沿えば、「アクイレシア地区」<sup>15)</sup> となる場所であるが）は、現在の行政区分ではゴリツィア県ではなくとも、もとゴリツィア県域であったり、教

会のゴリツィア司教区に属しているなど、ゴリツィアとの関係が少なからずあったと推測される。ゆえに、これらの地域が言語の上でも、ゴリツィアと類似点を示しても不思議はないであろう。以下、本稿では、このような広義の「ゴリツィア地区」を念頭に置き話を進めることにする。

ただし、ジェモーナとゴリツィアの2つの名前を出してはいても、マルケッティが記述しているのは、基本的に前者の方言の状況であると思われる。というのは、以下に論じるように、ゴリツィア地区の方言の状況は、ジェモーナのそれとは相違点があるように見えるのである。

**4. 重複用法との関連** 上述の民話集を見て気が付くのは、ゴリツィア地区の方言では、与格の過去分詞への前接は、多くの場合（必ずしも義務的にではなく）、人称代名詞の重複用法と関連して現れる、ということである。ただ、重複という言葉は様々な意味で用いられるので注意が必要である。

(1) 接語形の重複 ゴリツィア地区の幾つかの方言では、1つの動詞定形に、(同一対象を示す) 人称代名詞与格接語形が2つ、1つは後接形として、もう1つは前接形として、同時に接続し得る。このような形は、マルケッティは挙げていない（ジェモーナ方言には存在しないということか）。<sup>16)</sup>

32) *gi ài domandâdi* 「私は彼に尋ねた」(*ài domandât* 動詞 *domandâ* の直説法近過去1人称単数)  
(*Tiaris di Aculee*, p. 37 [Joannis]<sup>17)</sup>)

動詞の前の *gi* と *domandâdi* の *-i* が与格であるが、これはどちらも同一の人物を指している。

(2) 強形とそれを承け直す接語形代名詞 これと似て異なるのは、強形（独立の前置詞句）によって表される与格とともに、それを承け直す人称代名詞与格接語形が出現する、という構文である。言うまでもなく、多くのロマンス語で見られ、フリウリ語のさまざまな変種（ゴリツィア方言に限らず）に現れるが、やはり与格の重複用法(二重用法)と呼ばれることがあるので注意を要する。以下の例文 33-35 (MARCHETTI, p. 141 より抜粋したもの) はコイネー（中部方言）のものである。

33) *J disé a so fradi* 「彼は彼の兄弟に言った」(*disé* 動詞 *dî* の直説法遠過去3人称単数, *a* 前置詞「...に」, *so* 3人称単数の所有形容詞男性単数形, *fradi* 「兄弟」)

34) *a duc' ur pareve* 「皆には思われた」(*duc'* 「皆」, *pareve* 動詞 *parê* の直説法半過去3人称単数)

35) *cròdius a vualtris?* 「君たちのことを信じるだと？」(*crodi* 不定詞, *vualtris* 人称代名詞2人称複数)  
例文 33 では *a so fradi* 「彼の兄弟に」が *j* によって、34 では *a duc'* 「皆には」が *ur* によって、35 では *a vualtris* 「君たちに [信を置く]」が *-us* によって承け直されている。

(3) 接語の重複と承け直しの構文の併用 時には、(1) の接語形の重複用法は、(2) のような承け直しの構文と同時に用いられることもある。この場合、与格は、三重に繰り返されることになる。

36) *alora gi à domandâti al Signôr* 「そこで彼は主に尋ねた」(*alora* 副詞, *à domandât* 動詞 *domandâ* の直説法近過去3人称単数, *al* 前置詞+定冠詞男性単数形, *Signôr* 「主」) (*Tiaris di Aculee*, p. 257 [Fiumicello])

この文では、与格が、動詞 *à domandât* に対して前置されている *gi* と *domandât* に前接されている *-i*,

そして *al Signôr* という前置詞句によって、重複されて示されている。

**5. テキストの実例** ゴリツィア地区の方言で、与格の過去分詞への前接が、文章中でどのように現れるか、実例として1つの昔話を見てみよう。

Un vecjo di ca al contave che cuanche 'l are frut, che 'l veve za sui siet-vot ains, nol cresseve nuje. El mangjave pôc e nol durmive. Alore so pari 'l è lâa a domandâ dulà che 'l podeve partâlu, pal fat che 'l are simpri pissul e che 'l are simpri debilit. E' àn diti di lâa a Doberdò, che 'l are un benandant che 'l vuarive cu li' arbis.

Sichè une di e' son lâs ca di chist on. Cuanch'e son rivâs là, chist omp 'l à visitât el frut e j à diti a so pari: "Chist frut nol à nissun mâl, ma e' àn fati el malvôli". E j à dâdi une flascjute cunt un sirop e j à diti di bevi dute chê robe li un pôc in di e che, cuanch'e sarèssin rivâs a cjase, chiste persone 'e sares vignude a viodi.

Tomâs a cjase, su le puarte e' àn cjatade une femine ch'e stave ancje chê in tal so borc. E chiste femine 'e are chê persone ch'e veve fat el malvôli al frut. E dopo nol à mai vût mâl. (*Tiaris di Acuilee*, p. 117 [Chiopris])

(訳) ここの老人の一人が言っていたのだが、彼は、子供だったとき、もう7、8歳になるのに、ちっとも大きくならなかったそうだ。ほんの少ししか食べず、眠ることもなかった。それで、彼の父親は、彼がずっと小さくて虚弱なので、[彼を治すには]どこに連れて行けばいいのか人に尋ねに行った。すると、ドベルドに行きなさい、そこにはベナンダンテがいて、薬草で治してくれるから、とのことだった。

こうして、ある日、父親と息子は、この男のところに行った。彼らがそこに着くと、その男は子供を診て、父親に言った、「この子には具合の悪いところは全くない、ただ、誰かが、邪視による呪いを彼にかけたのだ」。そして、彼にシロップの入った小瓶を与え、そいつを、全部なくなるまで、少しずつ、毎日飲むようにと言った。そして、彼らが家に着いたら、この人は、様子を見にくるだろうと言った。

家に帰ると、玄関に一人の女が立っていた。その女も、同じ町内に住んでいたのだ。そして、この女が、子供に邪視をかけた人物であった。その後、子供は具合が悪くなることは二度となかった。

この文章では、過去分詞に前接する与格が、さまざまな度合の重複とともに（あるいはいかなる重複もなしに）用いられている点に注意したい。まず最初に、他の与格接語形との重複もなく、あるいは強形の与格の承け直としてでもなく、過去分詞に前接する与格が単独で用いられている例を見ておこう。例文 37 では *diti* の *-i* が、38 では *fati* の *-i* が、過去分詞に前接する与格である。

37) *E' àn diti di lâa a Doberdò.* 「彼らは彼にドベルドに行くようにと言った。」(e' 人称代名詞 3人称複数主格接語形 [標準化正書法では *a* ], àn dit 動詞 *dî* の直説法近過去 3人称複数形, *di* 不定詞の導入辞, *lâa* 不定詞, *a* 前置詞, *Doberdò* 地名) [民話テキスト中上から 3行目]

38) *e' àn fati el malvôli.* 「彼らは彼に邪視をしたのだ。」(àn fat 動詞 *fâ* の直説法近過去 3人称複数形, *el* 定冠詞男性単数, *malvôli* 「邪視」) [上から 5行目]

次の2つの例では、後接語の *j* と前接語の *-i* (例文 39 では *dâdi* の *-i*, 40 では *diti* の *-i*)、という具

合に接語の与格が重複して用いられている。

39) j à dâdi une flascjute 「[ベナンダンテは] 子供に小瓶を与えた。」 (à dât 動詞 dâ の直説法近過去 3 人称単数形, une 不定冠詞女性単数, flascjute 「小瓶」) [上から 5 行目]

40) j à diti di bevi dute chê robe li 「[ベナンダンテは] 子供にそいつを全部飲むよう言った。」 (di 不定詞の導入辞, bevi 不定詞, dute 形容詞女性単数形「すべての」, chê 指示形容詞女性単数形「その」, robe 「もの」, li 副詞「そこにある」) [上から 5-6 行目]

次の例では、与格は、後接語の j と前接語の -i, そして強形の a so pari と、三重に示されている。

41) j à diti a so pari. 「[ベナンダンテは] 子供の父親に言った。」 (à dit 動詞 di の直説法近過去 3 人称単数形, so 3 人称単数所有形容詞男性単数形「彼の」, pari 「父」) [上から 4 行目]

また、次のように、強形の与格 (al frut) のみが使われ、接語形の与格は全く出てこない文もある。

42) 'e veve fat el malvôli al frut. 「子供に邪視をかけた」 ('e 人称代名詞 3 人称単数女性主格接語形, veve fat 動詞 fâ の直説法大過去 3 人称単数形, frut 「子供」) [上から 8 行目]

ただ、これらの用法の間の違いが、何らかの意味がある使い分けなのか、あるいは自由変異なのかは、(この方言だけに限っても) にわかには断定し難く、さらに詳細な調査が必要であろう。

**6. 中部方言およびコイネーとの関係** 与格の過去分詞への前接について、マルケッティは、「普通の中部方言には無縁のもの」と言うほどであるから、これをコイネーの不可欠な一部として積極的に取り入れるという態度ではなかったと推測される。コイネーの文献では、この形を見かけることは稀だが、幾つか用例が見つからないわけではない。以下は、ミサ典礼書の初期の版からの引用である。例文 43 では diti の -i が、44 では dadi の -i が、過去分詞に前接されている。しかも、どちらの文も、動詞の前にも j が置かれているので、与格接語形の重複も示していることになる。

43) Lor j àn diti 「彼らは彼に言った」 (lor 人称代名詞 3 人称複数主格強形, àn dit 動詞 di の直説法近過去 3 人称複数) (*Messal Furlan pes domeniis e pes fiestis grandis pal an "B"*, p. 56)

44) j à dadi la glorie ... 「[神は] 彼に栄光をお与えになった」 (à dât 動詞 dâ の直説法近過去 3 人称単数, glorie 「栄光」) (*Messal Furlan*, p. 127).

ただし、このミサ典礼書 (一見したところ普通のコイネーで書かれているように見えるが) の成立には、ゴリツィア人が関与しているので、ゴリツィア方言の影響を疑うことができる可能性がある。<sup>18)</sup>

**7. 過去分詞への前接の場合以外の与格接語形重複用法** マルケッティは取り上げていないようだが、実は、与格の過去分詞への前接の他にも、接語形の与格が 2 つ重複して現れる構文がいくつか存在する。これらの構文と与格の過去分詞への前接との関連はまだ不明だが、参考までに紹介しておく。

(1) 不定詞に前接される場合 (-i-gi という形になる)

45) Tu tu podaressis fâigi mâl un'atre volte 「お前はまた別の時に彼に悪さをする事だってできるだろう」 (tu tu どちらも人称代名詞 2 人称単数主格だが、最初の tu は強形で 2 番目のは接語形,

podaressis 条件法単純形 2 人称単数, fà 不定詞形, mâl 「悪」, un' 不定冠詞女性単数形, atre 形容詞女性単数形 「別の」, volte 「回, 機会」) (*Tiaris di Aculee*, p. 97 [San Vito al Torre])

46) Al veva dessidût di contâigi la roba al fi 「彼はそのことを息子に話すように決めていた」(al 人称代名詞主格接語形, veva dessidût 直説法大過去 3 人称単数, di 不定詞の導入辞, contâ 「語る」, la 不定冠詞女性単数, roba 「事」, fi 「息子」) (*Tiaris di Aculee*, p.89 [Cervignano]) なお、この文では、与格が三重に表されていることにも注意。

(2) 幾つかの前置詞 (daûr 「の後ろに」, incuintri 「に向かって」など) に前接する接語形代名詞(この現象の詳細については、拙稿 2013 を参照のこと)が、動詞に付加されている与格代名詞接語形と重複して用いられる場合。この構文は(もし見落としがなければ) *Tiaris di Aculee* には見出せなかった。以下の用例は、コイナーによる聖書翻訳からの引用である(「オンライン聖書」 *Bibie in linie* <http://www.glesiefurlane.org/bibie> [最終確認日 2015 年 4 月 24 日]) を用いた: このテキストは、実質上、フリウリのカトリック教会の公式版のと同じものと思われる)。中部方言でも稀ではないと思われる現象だが、出現に特定の地理的偏りがあるのかどうかは調査されていないようである。

47) i anzians di Israel i lerin daûrji. 「イスラエルの長老達は彼の後について行った」[民数記 16, 25] (i 不定冠詞男性複数, anzians 「長老たち」, di 「の」, Israel 民族名, lerin 動詞 lâ の直説法遠過去 3 人称複数) 与格が, lerin の前の i と daûrji の -[j] i, により重複して示されている。

48) i lerin daûrji al om. 「彼らはその男の後について行った」[創世記 24, 61] (al 前置詞+不定冠詞男性単数形, om 「男」) この文では、与格は i, -[j] i, al om と三重に表わされている。

**8. 形態音韻論的考察：母音の強位置との関連** 与格の過去分詞への前接に関しては、もう一つ、方言的な差と思われる重要な変異がみられる。それは、与格が過去分詞の末尾に前接するとき、その前の -t がどのような音になるか、と言うことである。

コイナーおよびそのもととなった中部方言では、このとき、有声音化が起こって -d- となる。例えば例文 16 の puartadj (<puartât +j)。この変化は、もとの音の前に長母音 â があつたことに関係している。フリウリ語では、通常、長母音の発達する位置(強位置)は、長母音とそれに続く単子音からなる、語末音節の位置である (-V : C[-voice]#) のだが、この形態の後に、派生や曲用・活用などにより、母音ではじまる形態素がつく場合、母音は短くなり、子音は有声音化する (-VC [+voice] V)。

ところが、本稿で取り上げているゴリツィア地区の幾つかの方言では、与格代名詞が前接されても過去分詞の末尾の音は -t のままである(例えば例文 36 の domandâti)。これは、その方言では、フリウリ語に典型的な、母音の強位置・弱位置の対立およびそれに伴う子音の無声・有聲の交替の規則がもはや有効でないことを示している(これには、ゴリツィア方言の特徴とされている、母音の長短の音韻論的な区別の消失 (FRAU 1984, p. 112, 113) が関連しているのかも知れない)。つまり、これらの方言は、言語進化のより新しい時代・段階を示している可能性がある。

ちなみに、マルケッティは、*puartât + j > puartadj* に見られるように、*-t > -d-* の有声音化が起こる例しか挙げていない（例文 16-26）が、これはジェモーナの方言（母音の長短を明確に区別する音韻体系を持つ）の状況を反映しているものと推測される。

実は、このような方言ごとの違いは、形態音韻論的なレベルでの関心事にとどまらず、統語論的な研究とも関連する可能性を秘めている。というのは、接語形代名詞の前接が起こった時点で母音の強位置・弱位置の規則がまだ有効だったか否かに方言差があることに注目すれば、前接が起こった時期（あるいは少なくともその時期の方言差）を推定する助けになるかも知れないからである。

なお、*dit*（動詞 *dî* の過去分詞）～ *diti* や *fat*（動詞 *fâ* の過去分詞）～ *fati* のように、どの方言でも、与格の代名詞が前接しても *-t* が有声音化しない語もある。これは、この *-t* の前の母音がもともと短いため、長母音・短母音の交替が起きず、それに伴う子音の無声・有声の交替も起きないためである。

**9. 最後に** 今回取り上げた諸現象の解明には、さらに詳細な聞き取り調査が必要であろう。その方向は、大きく分けて、2つ考えられる。1つは、与格の過去分詞への前接という現象が（今回ほとんど取り上げられなかったゴリツィア市内および同領域を含め）どの場所に見出されるかという地理言語学的調査。もう1つは、各方言において、今回取り上げた与格の諸用法がどのように使われるのかという、現象の仕組みの構造的解明である。この両方向から研究を進めれば、この現象の発展の歴史的経緯や、なぜ何十キロも離れているジェモーナ地区とゴリツィア地区で類似の現象が起こっているのか（両者は、たまたま独立に、似たような現象を発達させたのか、あるいは、両者は何らかの形で繋がっているのか - 例えば、かつてこの現象は、より広範囲に分布していたが、何らかの理由で、この2つの地区のみに残った、というように）、という問題なども、いつかは解明できるかもしれない。

本稿で取り上げたような、いくつかの周辺的な方言にのみ見出される現象は、ややもするとその意義が過小評価されがちである。しかし、その研究を、この現象を持っている諸方言と持っていない諸方言との違いおよび関連を理解する試みと捉えれば、フリウリ語全体の歴史を理解することにもつながり、その重要さは無視できないものとなる可能性があるであろう。

注

- 1) 本稿では、原則として、(フリウリという名前も含め) フリウリの地名・人名は、参照の便をも考え(フリウリ語表記の地図は普及度が低い)、イタリア語形或いはそのカタカナ転写した形で表記する。
- 2) ブラケット [ ] は、音声表記などほかに、補足説明の表示にも用いた。
- 3) 今回は触れないが、その他の方言、つまり、北部山間部のカルニア方言、および西部方言についても、筆者の知る限りでは、状況は中部方言とは大きく異ならないと思われる。
- 4) 用語などには、説明の助けと思われる場合には、欧文（特にイタリア語）で訳を付しておいた。
- 5) 本稿では、フリウリ語の表記は、統一することは断念し、引用の場合は引用元のそれ（不適切と



思われる用法もあるが)に従い、それ以外のみ、できるだけ標準化正書法に準拠した。

- 6) 用例の和訳は、文脈などは考慮しておらず、あくまでも参考程度のもとお考えいただきたい。
- 7) この代名詞は、他の人称の接語形主語と異なり、使用が義務的であり、省略できない。
- 8) 以下、用例・例文に付した語注は、詳細な分析ではなく、あくまでも理解の一助として付したものである。原則として、本稿中、その時点で初出である語・形態を説明しているが、前出の箇所からある程度離れた所にある場合、重複を厭わず、類似の内容の説明を繰返したこともある。
- 9) *i* と *j* の区別は、この2つの文字をめぐる表記法上の混乱もあって、厳密な説明は困難である。実は、フリウリ語では(イタリア語でもだが)、両者は必ずしも発音の違いによって使い分けられているわけではなく、どちらも、母音も半母音も表し得る。例えば、注12を参照されたい。
- 10) 紙面の都合上、詳細な説明は省くが、*ur* が動詞に前接する時、「つなぎの母音」と言われる *-i* (*-j*) が現れることがある。別の例を挙げれば、*cialant* (動詞 *cialá* のジェルンディオ) + *ur* > *cialantjur* (LAMUELA 1987, p. 33) など。
- 11) 助動詞が *vê* 「持つ」である場合と *jessi* 「である」である場合が考えられるが、マルケッティは *vê* の例のみを挙げている。*Tiaris di Aculee* には、*lâ* 「行く」、*sucedì* 「起こる」など、(少なくともコイネーでは) 助動詞 *jessi* を取る動詞でも、与格代名詞が過去分詞に前接する用例が出てくる(ただし、ゴリツィア地区の方言は、これらの動詞にも複合時制形の助動詞として *vê* を使う)。また、時制については、マルケッティは、近過去形・大過去の例のみを挙げ、他の複合時制形には触れていないが、今回は、条件法過去の用法 (*gi vares sussedùti cussi* 「[彼女に] このようなことが起きることになっていた」*Tiaris di Aculee*, p. 81 [Ruda], なお後接語 *gi* と前接語 *-i* が重複) も確認できた。
- 12) この *puartadj* は、実際には *puartadi* と発音され、またそのように書かれる(例えば MARCHETTI, p. 164) こともある。また、注9も参照のこと。
- 13) ジェモーナは、山間部と平野部の間に位置していることから、その中間的な特徴を示す方言(基本的には中部方言と似ているが、保守的な特徴が幾つか見られる)をかつては持っていたと考えられる。だが、その後、平野部からの言語革新の影響を受け、そのような保守的な特徴は消えてしまったようである。例えば、マルケッティは、ジェモーナの多くの人や平野部の大部分では今や失われてしまっている、(*la vòs* 「声(単数)」～(*lis*) *vòs* 「同(複数形)」(*la, lis* は定冠詞)の発音上の区別(単数形は [vo:ʃ], 複数形は [vo:s] と発音していたと思われる)に言及している。
- 14) 地名を挙げておくと、Fiumicello, Chiopris, Viscone, Belvedere, Aquileia, Joannis, Saciletto, San Vito al Torre, Cervignano, Ontagnano, Morsano di Strada (おおむね、東から西、つまりゴリツィア県から近い順に並べた) などである。これらの場所の存在しているのは、おおよそ、東西には東経13度15分から13度25分、南北には北緯45度45分から45度57分の範囲に及び、ゴリツィア県に隣接しているものから、県の境界からかなり離れた所まで、さまざまである。

- 15) アクイレシアという町の名は、さまざまな現実の旗印として用いられるが、ここでは、おそらく、フリウリ南部、所謂「フリウリ低地地方」la Bassa を代表して用いられていると思われる。
- 16) マルケッティが挙げている用例（例文 16-25、ただし以下に記す事情のため 17 を除く）では、動詞の前の位置は、主語を表す人称代名詞接語形で占められているが、このような場合、与格を含めほかの種類（格）の人称代名詞接語形は、同時には現れにくいことが知られている（これらの代名詞が立つ場合、主語の人称代名詞接語形は、普通、脱落する：例文 26-31 参照）。
- 17) *Tiaris di Acuilee* から引用した用例には、採集された場所の地名を [ ] 内に記しておく。
- 18) この書に認可 *imprimatur* を与えたのも、ゴリツィアの司教ココリン Pietro COCOLIN である。ただ、どの部分を誰が執筆したかという正確な記録が残っているわけではないようである。

参考文献（主なもののみ）

- BENINCÀ, Paola, *Friaulisch: Interne Sprachgeschichte I. Grammatik. Evoluzione della Grammatica*, in HOLTUS, Günter / METZELTIN, Michael / SCHMITT, Christian, ed. by, *Lexikon der Romanistischen Linguistik* (LRL) vol. III, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1989, pp. 563-585.
- DELLA PORTA, *Grammatica friulana. Pratica*, Udine, Tipografia D. Del Bianco e Figlio, 1922.
- FAGGIN, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Udine, Del Bianco editore, 1985.
- FAGGIN, Giorgio, *Grammatica friulana*, Campofornido (Udine), Ribis, 1997.
- FRANCESCATO, Giuseppe, *Dialettologia friulana*, Udine, SFF, 1966.
- FRAU, Giovanni, *Friuli*, Pisa, Pacini editore, 1984.
- LAMUELA, Xavier, ed. by, *La grafie furlane normalizade*, edizioni de aminstratsion provinciâl di Udin, 1987.
- MARCHETTI, Giuseppe, *Lineamenti di grammatica friulana*, Udine, SFF, 1952.
- Messal furlan : seont la edizion tipiche vaticane*. Gurisse, Int furlane, 1971.
- Messal furlan pes domenîs e pes fiestis grandis pa l'an B: seont la edizion tipiche vaticane*. Udin, AGRAF, 1973.
- PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista, *Nuovo Pirona. Vocabolario Friulana*, 2a edizione. aggiunte e correzioni riordinate da FRAU, Giovanni, Udine, SFF, 1992.
- RIZZOLATTI, Piera, *Elementi di linguistica friulana*, Udine, SFF, 1981.
- Tiaris di Acuilee / Terre di Aquileia*, Istituto di ricerca "Achille Tellini", Chiandetti, Reana del Rojale (UD), 1997.
- VANELLI, Laura, La fonologia dei prestiti in friulano, in *Raetia antiqua et moderna*, ed. by HOLTUS, Günter & RINGGER, Kurt, p. 355-376, Tübingen, Niemeyer, 1986.
- 山本真司「フリウリ語の「人称代名詞付き前置詞」または前置詞と人称代名詞の融合」「ロマンス語研究」第46号, 2013年, pp. 1-10